

社会意識の規定因としての宗教 「信者」層・「家の宗教」層・「無宗教」層の比較

松谷 満

(大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程3年)

Religion as a Determinant of Social Attitudes

A comparison between three groups: "Religious," "Not religious," and non-religious members of a
"Family faith"

Mitsuru MATSUTANI

The purpose of this paper is to examine the influence of religion on social attitudes in Japan. JGSS-2000 data is used in this analysis. We analyze the differences in social attitudes between three groups: those who are "religious," those who are "not religious," and those who are members of a traditional "family faith" but are not religious themselves. General Social Survey data is also used in order to make reference to effects of religion in America.

We found religion's effects were weak and restricted to specific domains (politics, family values and confidence in authority). Religious attribution has a strong effect on gender, sexuality and life ethics in America, but has no effect on these topics in Japan. Generally, the direction of this relation was linear. Religious people have more conservative and traditional attitudes. Those who have a "family faith" also have some unique characteristics.

Based on these results, we consider (1) Differences in religious values between Japan and America, (2) The relation between religion and cultural shifts in modern society, and (3) The social function of Japanese religion.

Key words: social attitude, social function of religion, General Social Surveys

本稿の目的は、宗教が、現代日本人の社会意識に、いかなる影響を及ぼしているのかを、JGSS-2000 データの分析をとおして、明らかにすることにある。具体的には、「信者」層・「家の宗教」層・「無宗教」層という、宗教的な帰属の違いが、社会意識の差異化要因となっているかを、GSS データも参照しつつ、検証した。

その結果、宗教的属性と社会意識との関連は、特定の領域に限られ、関連の程度も弱いことが分かった。具体的には、ジェンダー、セクシュアリティ、生命倫理の領域では関連がなく、政治、家族観そして権威への信頼といった領域において関連がみられた。その関連の方向は、宗教へのコミットが強い層ほど、従来の価値観を支持する傾向があるというものであった。

結果をもとに、(1)日米における宗教的価値観からくる相違、(2)現代社会における文化変動と宗教の役割、(3)日本における宗教の社会的機能という観点から考察を加えた。

キーワード：社会意識、宗教の社会的機能、General Social Surveys

1 . 問題

1.1 目的

現代日本人の社会意識に、宗教はいかなる影響を及ぼしているのか。JGSS-2000 データの分析をとおして、このことを明らかにするのが、本稿の目的である。

宗教と社会意識との関係を主題とする研究は、欧米において多くの蓄積がある。アドルノらが宗教と権威主義との関係を、オルポートらが宗教と人種的偏見との関係を明らかにした研究などが、この分野の代表的なものである⁽¹⁾。近年では、中絶や安楽死などの「生命倫理」に関わる問題が取り上げられ、宗教的要因が、それらのトピックに対する人々の意識を、どの程度左右するかということに、研究者の関心が集まっている。

一方、日本において、こうした研究は、ほとんど見当たらない。欧米のように、中絶の是非などをめぐり、激しい議論が繰り広げられるという場面が、社会のなかで顕在化していないことなどが、理由としてあげられるだろう。

しかし、顕在的でないことは、必ずしも、関連がないということの意味しない。多くの国々において、宗教は個人の内面の問題にとどまらず、社会的な価値観に影響を及ぼしている。日本でも、かつて、仏教や神道のような明確な宗教の下に共同体的、村的な論理というものがあり、それは人々の行動規範となってきたのである(橋爪・島田, 2002: 259)。

日本において、宗教の影響力が乏しいというのは、経験的には分からなくもない。しかし、それはまだ実証的に確認されたものではない。実際には、潜在的な関連があるのかもしれないのである。

本稿の問題意識は、宗教研究にとどまらず、計量的な社会意識研究にも、新たな視点を付け加えるものである。これまで社会意識研究では、階層的要因が中心的な軸として捉えられてきた。もちろん、「階層」は外すことのできない基礎概念である。しかし、欧米の研究においては、宗教変数が説明変数や媒介変数として登場することが珍しくない。日本は欧米と比較して、宗教の社会的影響力が弱いと考えられるが、それでも特定の意識領域においては宗教が関わっているのではないだろうか。

本稿では、そのような関心から、宗教的な帰属の違いが、日本においても社会意識の差異化要因としてはたらいっているのか、どのような方向へと差異化させているのか、ということを実証的に明らかにする。

1.2 分析枠組

まず、分析の枠組を明らかにしておく。第一に、宗教が社会において、どのように機能するがゆえに、社会意識に対して影響力をもちうるのかということが問題となる。筆者はこれまで、欧米における先行研究を概観し、JGSS と関連があるアメリカの General Social Surveys (GSS) や世界価値観調査のデータについても、分析を行なっている。それらを踏まえ、宗教の社会的機能をあえて単純化するならば、次のようなことがいえる。

それは、伝統宗教（欧米ではキリスト教）の熱心な信者ほど、伝統的な価値観や社会意識を強くもつ傾向があるということである。宗教の社会的機能として、よくいわれるのは保守的機能と変革的機能である（O Dea, 1966）。伝統宗教は、その社会での既成の価値や目標を強調することによって、社会の統一と安定を強める役割を果たすことが多い。したがって、伝統宗教に強くコミットする者ほど、「伝統的」あるいは「保守的」な意識の持ち主ということになるのである。もっとも、どのような意見が保守的であるのか、ということとはきわめてあいまいであり、その点は慎重に考慮する必要がある。

本稿では、JGSS-2000 データを用いるのであるが、JGSS は GSS との比較も視野にいれた調査票の設計がなされている。分析では、その特徴をいかし、GSS データでみられるような宗教と社会意識の関連が、JGSS データにおいても見出せるのか、ということを検証してみよう。もちろん、日米では宗教的、社会的背景が多くの部分で異なっており、厳密な比較は不可能である。本稿では、あくまでも JGSS データの分析が中心であり、GSS データはその手がかりとして、参照するために用いられる。

次に、説明変数としての宗教変数をどう設定するか、ということが問題となる。欧米の研究では、多くの場合、キリスト教信者が対象となるので、礼拝出席の頻度が、信仰の熱心さを測定する一指標となりうる。しかし、日本では、そのような変数は実情に即したものではない。したがって、本稿では便宜的に、「Q57（留置票）あなたは、信仰している宗教がありますか」という設問への回答を、「宗教的属性」とみなすことにする。この設問の選択肢には、「信仰がある」「信仰はない」以外に、「特に信仰していないが、家の宗教はある」が加えられている。既存の世論調査では、ほとんどの場合、「ある」「ない」という、二者択一の選択肢が採用されてきた。しかし、実際には、「信仰あり」のなかに、「特に信仰していないが、家の宗教はある」という人々が含まれてきたと推測される（木村, 2002）。信仰はないが、家の宗教はあるというのも、きわめて日本的な心性であると考えられるため、JGSS での選択肢は、より実情に即したものといえよう。したがって、本稿では、宗教的属性を「信者」層・「家の宗教」層・「無宗教」層に分類し、それを主に質的変数として扱うこととする。端的に量的変数とみなさないのは、「家の宗教」層が、「信者」層と「無宗教」層の中間形態であると一概にいえるかどうか分からないためである。

分析に入る前に、具体的な課題を明らかにしておく。主要課題は、アメリカにおけるキリスト教と等価的な機能、すなわち伝統的価値規範の維持という役割を、日本の伝統宗教が果たしているのか、を検証することである。ここでの伝統宗教とは、仏教およびその諸宗派である。クロス集計の結果、「信者」層の 58.3%、「家の宗教」層の 94.6%が、仏教であった⁽²⁾。他の宗教については、サンプルが少ないため、本稿では取り扱わない。

また、付随的な課題として、「家の宗教」層が、「信者」層と「無宗教」層との中間形態として位置づけられるのか、それとも独自の性格をもつのか、を検証する。おそらく、宗教的な熱心さという点では、「家の宗教」層は、中間形態であるだろう。しかし、社会意識

との関連という面では、異なるかもしれない。宗教的属性の3分類は、社会意識において、一貫して連続的なものなのか、それとも非連続的な部分もあるのだろうか。分析をとおして、「家の宗教」という日本独特の存在形態の意味についての理解も深められよう。

2. 変数

2.1 社会的属性と宗教的属性

本稿の主要変数である宗教的属性の度数分布は、表1のとおりである。一見して、分布が偏っているのが分かるが、これが日本における宗教の現状である。

まず、宗教的属性と性別や年齢などの社会的属性との関連について確認しておかねばならない。なぜなら、後の分析において、宗教的属性と社会意識変数との直接的な関連をみる際には、その双方との相関が強い社会的属性の影響を統制する必要が出てくるからである。

表1 宗教的属性のカテゴリ分布

	度数	パーセント
信者(仏教)	133	5.0
家の宗教(仏教)	632	24.0
無宗教	1869	71.0
合計	2634	100.0

(注) 欠損 259

表2において、宗教的属性と主たる社会的属性との関連を一覧にして示した。JGSSはサンプル数が多いため微小な差異でも有意となりやすいことを考慮すると、0.1%水準で有意な差がある年齢、教育年数、市郡別が、宗教的属性の主たる規定因として作用していると考えられる。それらは、いずれも直線的な関係にある。「信者」層には高齢者が多く、教育年数は、「無宗教」層のほうが高くなっている。市郡別では、「無宗教」層のほうが都市部在住の傾向が強い。そして、「家の宗教」層は、中間に位置している。

表2 宗教的属性と社会的属性

	性別(女性%)	年齢	教育年数	世帯年収	社会階層	市郡別
信者	54.1	63.0	10.8	13.0	3.4	2.16
家の宗教	49.2	57.0	11.6	13.8	3.3	2.16
無宗教	56.2	47.9	12.1	14.0	3.4	2.03
F		120.44	17.39	1.134	3.291	10.529
有意確率	P<.05	p<.001	p<.001	有意差なし	P<.05	p<.001

(注) 性別のみクロス集計、それ以外は分散分析の結果による(df=2)。教育年数は原・海野のものを参照し筆者が作成した(原・海野, 1984)。世帯年収は選択肢のカテゴリをそのまま用いている。数値が低いほど、社会階層は上層、市郡別では都市部在住であることを意味する。

それでは、この三変数の宗教的属性に対する直接的な関連の強弱はどのようになっているのだろうか。宗教的属性の連続性を想定し、重回帰分析を試みた。

表3から明らかなように、宗教的属性は、かなりの程度、年齢によって左右されている

表3 宗教的属性の規定因

	標準偏回帰係数
性別	.040*
年齢	-.323***
教育年数	-.074**
市郡別	-.070***
R ²	.092***

(注) N=2,615 * p<.05 **p<.01 *** p<.001

ことが分かる。高齢であるほど、「信者」層が多く、逆に若年層ほど、「無宗教」層が多い。この結果は、既存の世論調査における知見とも一致するものである⁽³⁾。したがって、宗教的属性と社会意識変数との関連をみる際には、年齢の影響を考慮する必要があるだろう。

2.2 GSS データの分析に基づく社会意識変数の選択

次に、分析に用いる社会意識変数を選択する。先にも述べたように、まず、GSS データにおける宗教と社会意識との関連を探索的に分析し、関連のみられたものを中心に、JGSS-2000 データにおいて分析を行なう。

GSS データによる分析を詳述することは、紙数の都合上、困難であるため、その手続きのみを要約して述べる。まず、JGSS-2000 と同時期に行なわれた GSS-2000 データのみを対象とした（サンプル数は 2,817）。宗教的属性は、JGSS とは異なるため、なるべく類似する形に構成した。本稿での枠組に対応するものとして、最終的に、「プロテスタント信者で月一回以上礼拝に出席する」層（N=845）・「プロテスタント信者であるが、年に数回以下しか礼拝に出席しない」層（N=678）・「無宗教」層（N=398）に分類した。

ここで問題となるのは、プロテスタントの異なる教派をひとくくりにすることの妥当性である。アメリカではプロテスタントであっても、リベラルな教派からファンダメンタルな教派までかなり幅がある。しかし、筆者の分析によれば、リベラルな教派の信者であっても、礼拝に熱心に参加するような層はむしろ、保守的な人々が多いことが確認されている（松谷 2002b）。したがって、さまざまな問題はあっても、今回は、先の分類を用いる。

また、JGSS-2000 と条件を合わせる目的で、年齢を統制変数として用いた⁽⁴⁾。具体的には年齢を「30 代以下」「40-50 代」「60 代以上」に三分類し、年齢および宗教的属性を独立変数、社会意識変数を従属変数とした二元配置の分散分析を行なった。

結果として、取り上げたほとんどの変数において宗教的属性が 5%水準で有意であった。そのうち二つを除き、宗教的属性は社会意識変数と直線的な関係にあった。表 4 をみると、やはり、熱心な信者ほど、一般的に「伝統的」「保守的」とされる方向を支持しているようである。この結果は、先行研究における知見とも、おおむね一致するものである。

表 4 GSS-2000 における宗教的属性と社会意識

変数名	「熱心な信者」層の傾向	JGSS との選択肢の違い
死後の世界	「はい」	「はい」「いいえ」のみ
夫は外で働き、妻は家庭を守るべき	「賛成」	
婚外交渉の是非	「悪い」	
同性間の是非	「悪い」	
ポルノ規制の是非	「禁止」	
安楽死の賛否	「いいえ」	「はい」「いいえ」のみ
政治的志向	「保守的」	7 点尺度
他人の利用	非連続的	
死刑制度の賛否	非連続的	「賛成」「反対」のみ

次節では、表4を参考にしつつ、それにJGSS独自の変数を付け加え、探索的に宗教的屬性の影響をさぐることにする。分析に用いる社会意識変数は以下の通りである。

表5 分析に用いる社会意識変数

分類	変数	質問項目の情報
宗教	死後の世界	「Q14 あなたは、死後の世界を信じますか。」(「わからない」を中間回答とみなしリコード) 1=「はい」 2=「わからない」 3=「いいえ」
	三世同居観	「Q12 あなたは一般に、三世同居(親・子・孫の同居)は望ましいことだと思いますか。」 1=「望ましい」 2=「望ましくない」
家族	離婚観	「Q13 (これらの意見について)あなたは賛成ですか、反対ですか。」 「A 一般に、結婚生活がうまくいかず幸せでない場合、子どもにとっては、両親が離婚に踏み切った方がよい。」 「B ~妻にとっては、離婚に踏み切った方がよい。」 「C ~夫にとっては、離婚に踏み切った方がよい。」 1=「賛成」 2=「どちらかといえば賛成」 3=「どちらかといえば反対」 4=「反対」 3項目を加算(α 係数=.889)
	結婚観	「Q43 (これらの意見について)あなたは賛成ですか、反対ですか。」 「B なんといっても女性の幸福は結婚にある。」 「F なんといっても男性の幸福は結婚にある。」 「K 一般的にいて、結婚していない人よりも結婚している人の方が幸せである。」 1=「賛成」 2=「どちらかといえば賛成」 3=「どちらかといえば反対」 4=「反対」 3項目を加算(α 係数=.815)
ジェンダー	性別役割意識	「Q43 (これらの意見について)あなたは賛成ですか、反対ですか。」 「A 夫に十分な収入がある場合には、妻は仕事をもたない方がよい。」 「E 夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ。」 「G 母親が仕事をもつと、小学校へあがる前の子どもによく影響を与える。」 「J 妻にとっては、自分の仕事をもつよりも、夫の仕事の手助けをする方が大切。」 1=「賛成」 2=「どちらかといえば賛成」 3=「どちらかといえば反対」 4=「反対」 4項目を加算(α 係数=.765)
セクシュアリティ	婚外交渉の是非	「Q48 既婚者が、配偶者以外の異性と性的関係をもつことについて、あなたの考えは以下のどれですか。」 1=「例外なく悪い」 2=「たいていの場合悪い」 3=「必ずしも悪くない」 4=「悪くない」
	同性愛の是非	「Q50 同性愛間の性的関係について、あなたの考えは以下のどれですか。」 1=「例外なく悪い」 2=「たいていの場合悪い」 3=「必ずしも悪くない」 4=「悪くない」
	ポルノ規制の是非	「Q52 次の意見のうち、ポルノの規制に対するあなたの考えに一番近いものはどれですか。」 1=「年齢にかかわらず禁止されるべきだ」 2=「18歳未満に対しては禁止されるべきだ」 3=「完全に自由化されるべきだ」
法と秩序	権威への信頼	「Q29 (以下のものについて)あなたはどれくらい信頼していますか。」 「K 国会議員」「L 市区町村議会議員」「M 自衛隊」「N 警察」 1=「とても信頼している」 2=「少しは信頼している」 3=「ほとんど信頼していない」*「わからない」は欠損とした。 4項目を加算(α 係数=.777)
	死刑制度の賛否	「Q16 あなたは、死刑制度に賛成ですか、反対ですか。」(「わからない」を中間回答とみなしリコード) 1=「賛成」 2=「わからない」 3=「反対」
生命倫理	安楽死の賛否	「Q46 不治の病におかされた患者が、痛みを伴わない安楽死を望んでいるとします。その家族も同意している場合に、医者が安楽死を行える法律をつくるべきだと思いますか。」(「わからない」を中間回答とみなしリコード) 1=「はい」 2=「わからない」 3=「いいえ」
人間観	他人の利用	「Q26 機会があれば、たいていの人は自分のために他の人を利用すると思いますか。」(「場合による」を中間回答とみなしリコード) 1=「はい」 2=「場合による」 3=「いいえ」
	人は信用できる	「Q27 一般的に、人は信用できると思いますか。」(「場合による」を中間回答とみなしリコード) 1=「はい」 2=「場合による」 3=「いいえ」
	人間の本性	「Q28 人間の本性について、あなたはどのようにお考えですか。~番号(1~7)を1つ選んでください。」 1=「人間の本性は本来「悪」である」~ 7=「人間の本性は本来「善」である」
政治	政治的志向	「Q59 政治的な考え方を保守的から革新的までの5段階にわけるとしたら、あなたはどれにあてはまりますか。」 1=「保守的」~ 5=「革新的」

3. 分析

まず、宗教的属性を独立変数、15 の社会意識変数をそれぞれ従属変数として、宗教的属性によって平均値が異なるかどうかをみるため、一元配置の分散分析を行なった。その結果、「他人の利用」「人は信用できる」以外のすべての項目で、5%水準で有意に差がみられた。表面的には宗教的属性は社会意識と多くの部分で関連しているようである。しかし、関連の強さをみるイータの2乗については、どれも 0.1 以下という低さであった。関連があるとはいっても、その程度は、わずかなものようである。また、この結果は年齢を統制する前のものである。引き続き、宗教的属性(3カテゴリ)と年齢(3カテゴリ)とを独立変数とした二元配置の分散分析を行なった。

結果を表6に示した。注目すべきは、年齢を投入することによって、宗教的属性の効果が一段と低くなったことである。宗教的属性が有意に関連していた13の変数のうち、「性別役割意識」「婚外交渉の是非」「同性愛の是非」「ポルノ規制の是非」「死刑制度の賛否」「安楽死の賛否」において、5%水準で有意ではなくなっている。それらは宗教的属性と年齢との関連の強さからくる、擬似的な関連であったことが明らかになった。これらは、著者の分類では、ジェンダー、セクシュアリティおよび生命倫理に関する変数であるが、いずれも、GSSでは関連がみられたものである。その違いは興味深いところであるだろう。

また、有意な関連がみられたものでも、年齢のほうが、明らかに関連が強いと推測される変数が多い。例外は、「死後の世界」「三世代同居観」「人は信用できる」くらいである。ちなみに「人は信用できる」は、一元配置の分散分析では有意ではなかったものである。

表6 宗教的属性および年齢の社会意識への影響

		F 値	
		宗教的属性	年齢
宗教	死後の世界	20.07***	11.21***
	三世代同居観	10.10***	0.41
家族	離婚観	4.29*	10.93***
	結婚観	3.53*	56.84***
ジェンダー	性別役割意識	1.71	45.82***
セクシュアリティ	婚外交渉の是非	0.37	12.07***
	同性愛の是非	1.20	86.06***
	ポルノ規制の是非	1.98	48.08***
法と秩序	権威への信頼	7.43**	18.72***
	死刑制度の賛否	1.65	1.47
生命倫理	安楽死の賛否	1.09	2.81
人間観	他人の利用	0.37	9.85***
	人は信用できる	3.28*	1.54
	人間の本性	3.13*	7.48**
政治	政治的志向	3.35*	24.57**

* p<.05 **p<.01 *** p<.001

次に、有意な関連がみられたものについて、具体的に、どのような関連の方向であることを確認する。分散分析にもとづいて算出された推定周辺平均を表7に示した。

表7 推定周辺平均

宗教的属性	死後の世界	三世代同居観	離婚観	結婚観	権威への信頼	人は信用できる	人間の本性	政治的志向
信者	<u>1.65</u>	1.30	7.41	6.53	8.53	1.88	4.50	2.79
家の宗教	2.11	<u>1.26</u>	7.14	6.66	9.16	1.89	<u>4.67</u>	2.82
無宗教	2.17	1.37	6.85	6.92	9.40	<u>1.97</u>	4.49	2.93

平均の比較によって分かることは、多くが直線的な関係にあるということである。「三世代同居観」「人間の本性」以外は、程度の差はあれ、すべて直線的な関連と見なす。

「死後の世界」については、「信者」層が肯定する傾向にあるのに対し、「家の宗教」層、「無宗教」層では、否定あるいは分からないとする傾向が強い。「死後の世界」は宗教の領域に属するものであるため、この結果は当然だろう。

「家の宗教」層の特徴がみられたのは、「三世代同居観」「人間の本性」においてである。「家の宗教」層は、他の層よりも、三世代同居を望ましいことと考え、また、人間の本性は善であるとみなす傾向にある。しかし、「人間の本性」における関連はきわめて小さなものである。

「信者」層は、離婚については否定的、結婚と幸福とを結びつける傾向が強く、権威に対する信頼も強い。また「政治的志向」においては保守的であり、どちらかという人は信用できると考えている。「無宗教」層はちょうどその対極に位置づけられ、「家の宗教」層は、両者の中間に位置している。ただし、「人は信用できる」に関しては、「信者」層と「家の宗教」層にほとんど違いがない。

ここで、分散分析では取り上げることができなかった「支持政党」(面接票 Q14)と宗教的属性との関連についてふれておきたい。クロス集計によって確認した結果、表8のように、有意な関連がみられた。念のため、年齢を投入した三重クロス表についても確認したが、どの世代においても関連がみられることが分かった。

表8 宗教的属性と支持政党(「好ましい政党」含む)のクロス表

	自民	民主	公明	自由	共産	社民	保守	その他	支持なし	N
信者	46.7	11.7	10.8	4.2	0.8	2.5	0.8		22.5	120
家の宗教	35.9	12.5	0.5	2.2	3.2	5.2	0.3	0.2	40.1	594
無宗教	20.9	10.3	1.3	2.7	3.5	3.1	0.1	0.3	57.8	1,702
合計	25.9	10.9	1.6	2.6	3.3	3.6	0.2	0.2	51.7	2,416

Pearsonの二乗値 192.795 自由度=16 $p < .001$ Cramerの $V = .200$

「支持政党」との関連では、「信者層」は、自民党、自由党、公明党に対する支持が多く、「支持政党なし」は22.5%にすぎない。「家の宗教」層は、「無宗教」層と比較すると、自民党、社民党に対する支持が多いのが特徴である。一方、「無宗教」層は「支持政党なし」が57.8%と過半数を超えるのが特徴的である。こうしてみると、宗教的属性と「支持政党」と

のあいだには、単純に直線的な関連はみられないものの、「信者」層がより保守的であるということは確かなようである。

GSS と JGSS とで共通する変数において、同様の傾向がみられ、かつ有意であったのは、「死後の世界」「政治的志向」のみであったが、全体的にみれば、宗教へのコミットが強いほど、「保守的」「伝統的」な意識傾向を示すということがいえそうである。

しかし、関連の強さということになると、日米では大きな差がみられる。直線的な関係がみられたものに対して、GSS において、年齢を制御変数として偏相関係数を算出したところ、宗教的属性と社会意識変数との間には、0.2~0.3 程度の比較的強い関連が見いだされた。JGSS についても同様に偏相関係数を算出した。その結果が表 9 である。

表から明らかなように、偏相関係数の値は GSS と比較してかなり低いものとなっている。もっとも高いのが、「権威への信頼」の .123 で、もっとも低い「結婚観」は .047 でしかない。宗教的属性と社会意識との関連は、見出されはしたものの、かなり微弱な差異なのである。

表 9 偏相関係数

	偏相関係数
死後の世界	.100***
離婚観	-.055**
結婚観	.047*
権威への信頼	.123***
人は信用できる	.061**
政治的志向	.075***

(注)制御変数 :年齢 * p<.05 **p<.01 *** p<.001

4 . 議論

それでは、分析結果について整理したうえで、若干の議論を展開させることにしよう。本稿の具体的課題は、アメリカにおけるキリスト教（プロテスタント）と同等の機能を日本の伝統宗教である仏教が果たしているのか、というものであった。分析では、仏教を軸として宗教的属性尺度を構成し、それと社会意識変数との関連を探索的にさぐった。また、宗教的属性の主たる規定因である年齢の影響を統制し、直接的な関連の有無を検討した。

その結果、GSS との比較において、宗教的属性と社会意識変数との関連は、特定の領域に限られ、また、関連の程度も弱いものであることが明らかになった。具体的には、ジェンダー、セクシュアリティ、生命倫理の領域では関連がなく、政治、家族観そして権威への信頼といった領域において関連がみられた。その関連の方向は概して直線的なものであり、宗教へのコミットが強い層ほど、政治意識、家族観において従来の価値観を支持する傾向があった。また、人を信用するという傾向もみられた。

付随的な課題として、「家の宗教」層が、「信者」層と「無宗教」層との中間形態として位置づけられるのか、ということをおげた。「家の宗教」層の独自性は、三世代間同居を支持するという点にあらわれた。このことから、「家の宗教」層はやはり、「家」の存続やつながりをより重視する人々であることが推測されよう。それ以外の側面においては、「家の宗教」層は中間形態である。「信者」層ほどは、「保守的」「伝統的」な意識をもたないけれども、「無宗教」層ほどに、寛容な態度を示すわけでもないのである。

以下、分析結果から、三点について考察を試みる。

第一に、日米における相違点に注目する。政治意識については共通の部分が見出されたが、ジェンダー、セクシュアリティ、生命倫理といった領域では関連がみられなかったのは、なぜだろうか。これは両国の宗教的価値観の違いに起因すると思われる。キリスト教においては、性規範や性別役割規範、そして倫理的規範が日常生活においても、厳格に適用されてきた。それらの価値規範が衰退しつつある現代においても、宗教へのコミットが強い人々にとっては、なお宗教的価値観にもとづく要請が重要な意味をもつのである。

一方、日本においては、仏教および民俗宗教的な宗教的価値観が基盤となっている。ここでは、規範自体もそれほど明確なものではなく、かつ、日常生活への厳格な適用も迫られない。したがって宗教的属性が直接的な効果をもたないのである。

第二に、現代社会の文化変動についてである。GSS、JGSSともに社会意識において、年齢の影響は大きいものであった。とくに、JGSSにおいては、ほとんどの領域において、年齢の影響は、宗教の影響を凌駕するものであった。

年齢が影響する理由として、世代効果とライフサイクル効果とが考えられるが、ここでは、世代効果を前提として論を進めたい。なぜなら、社会意識全般において、現在の若年層が加齢によって、伝統的・保守的な価値観に接近するとは考えにくいからである。しかし、この点についてはJGSSが今後、時系列データを蓄積することに期待しよう。時系列データによってはじめて、どの部分がライフサイクルによる効果で、どの部分が世代による効果なのかが明らかになるのである。

世代効果を前提とすれば、社会の多くの領域において、旧来の価値観がゆるやかにではあるが、根底から揺さぶられつつあると、みることができる。年齢と宗教的属性との関連、そして、年齢と社会意識との関連の強さをみるにつけ、宗教は、文化変動の一連の流れのなかで、周辺的な位置づけしか与えられていないようにもみえる。今後も、世代の入れ替わりを軸として、この国の伝統的価値規範は、なおいっそう崩されていくのではないかと。

再び、アメリカの現状に目を転じると、宗教的価値観は、文化変動の抑止力として、一定の役割を担っていることが分かる。時代が逆行することはありえないが、宗教的価値観はそれに対し、ブレーキをかけ、意識や価値観の変容を議論の遡上にのせるのである。欧米で、さまざまな問題が宗教的価値観との絡みで、対立や議論を生み出しているのは、そのせいではないだろうか。一方、日本では、本稿の結果からも明らかなように、価値観の変容に対する宗教的な反発や反応が著しく弱い。文化変動への反発という相互作用の不在が、日本社会にとって、どのような意味をもつのか、興味深いところである。

第三に、弱いながらも見出された関連に注目しよう。宗教は、「離婚観」「結婚観」という家族観を維持させ、「政治的志向」「支持政党」にみられるように保守的な政治意識へと方向づけるものであった。また、「権威への信頼」をも促すものであった。このように、日本においても宗教は、現存する社会秩序や価値規範の維持を志向させる要因として、機能

しているのである。とくに、「権威への信頼」は、社会意識研究においてよく用いられる「権威主義態度」と同質のものとみることにも可能である。今後の研究においては、「権威主義的態度」の規定因として、宗教変数の導入も、検討の余地があるのではないだろうか。

最後に、今後の課題について言及する。まず何よりも、JGSS の時系列データをもとに、本稿での分析のさらなる精緻化が求められよう。

また、次回以降の JGSS はサンプル数も増やされるようであるから、仏教以外の宗教についてもいずれ、検討することができるかもしれない。しかし、日本において仏教以外の「信者」層はきわめてマイノリティであり、かつ多様な宗教に分散している。筆者は GSS および JGSS に倣い、それと比較可能な調査票を用いた局所的な調査を阪神地域のキリスト教会について行なっている（松谷，2002a）。マイノリティを扱う場合には、このように、大規模な総合調査と局所的な個別調査との併用なども、検討に値するだろう。

[謝辞]

本稿で用いた日本版 General Social Surveys (JGSS) データは、大阪商業大学地域研究所 JGSS 事務局の許可を得て、東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センターから提供されたものである。また General Social Surveys データは、ICSPR 及び ICPSR 国内利用協議会 (ICPSR Japanese National Membership) の許可を得て、提供された。関係者の皆様にここで謝意を表したい。

[Acknowledgement]

日本版 General Social Surveys (JGSS) は、大阪商業大学比較地域研究所が、文部科学省から学術フロンティア推進拠点としての指定を受けて (1999-2003 年度)、東京大学社会科学研究所と共同で実施している研究プロジェクトである (研究代表：谷岡一郎・仁田道夫、代表幹事：佐藤博樹・岩井紀子、事務局長：大澤美苗)。データの入手先は、東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センター SSJ データ・アーカイブである

[注]

- (1) 欧米での研究動向については、金児のレビューが詳しい (金児，1997: 42-53)。
- (2) 本稿では、具体的な宗教名を問う Q57 (留置) で、仏教およびその諸宗派名を回答した者および「仏教と神道」と回答した者を「仏教」に分類している。
- (3) 石井研士『データブック 現代日本人の宗教』(1997 年、新曜社)などを参照されたい。
- (4) GSS データにおいても、宗教的属性を従属変数とする重回帰分析を行なったところ、やはり、年齢がもっとも大きな直接効果をもっていた。

[参考文献]

- 橋爪大三郎・島田裕巳, 2002, 『日本人は宗教と戦争をどう考えるか』朝日新聞社 .
- 原純輔・海野道郎, 1984, 『社会調査演習』東京大学出版会 .
- 石井研士, 1997, 『データブック 現代日本人の宗教』新曜社 .
- 金児暁嗣, 1997, 『日本人の宗教性 オカゲとタタリの社会心理学』新曜社 .
- 木村雅文, 2002, 「現代日本人の宗教意識 JGSS-2000 からのデータを中心として」大阪商業大学比較地域研究所・東京大学社会科学研究所編『JGSS-2000 で見た日本人の意識と行動』, 125-134 .
- 松谷満, 2002a, 「宗教性と社会意識 キリスト教信者アンケート調査を事例に」『ソシオロジ』社会学研究会, 47(1): 91-108 .
- 松谷満, 2002b, 「キリスト教信者の社会意識における文化的差異 日米信者の計量的比較研究」(未発表論文).
- O Dea, Thomas F., 1966, *The Sociology of Religion*, N.J.: Prentice-Hall. (= 宗像巖訳, 1976, 『宗教社会学』至誠堂.)